

私の尊敬する人物

川上 清文

1号館3階の学生相談室の近くに、その人の研究室はあった。毎週1時間お会いし話す機会をいただいていたが、研究室に近づくと緊張で身が引き締まった。深呼吸をしてドアをノックすると、いつもの穏やかな声と微笑みが待っていた。Sr. Mary Blishであった。

一九七九年の学内のクリスマスパーティーで、私は初めてシスターに出会った。私は翌年国際学会で発表することになっていたが、英語に自信がなかった。そのパーティーでS. 内山に相談したら、シスターを紹介してくれたのだった。シスターは「週に1回お話ししましょう」と言って下さったのだが、それはシスターが帰国される一九九六年まで続いたのである。

毎週聖書を1章ずつ読んでいく中で、私はシスターから多くのことを学んだ。

例えば、私の「キリスト教で一番大切なことは何ですか?」という問いに「自由」と明言された。「愛」とか「許し」とかの答えを予想した私に強く響いた言葉であった。

だれかが亡くなった、というような時は「その人は永遠の世界に入ったのだから幸せ。気の毒なのは

周囲の人」といわれた。九六年の帰国時にも、同様の視点を教えられた。私が「多くの人がシスターとの別れを惜しんでいる」というと「あなた方にとって別れるのは私一人だが、私はたくさんの人と別れなければならぬ」と返されたのである。

ある時、私が「最近学生は学内で会っても挨拶しない」というと「あなたは挨拶しているの？」といわれた。いつの間にか私は『学生がまず挨拶すべき』という教師根性に染まっていた。後日、私の前をシスターが歩いていたのだが、シスターは学生より先に声をかけていた。

ジョン・S・ミルは「大学が道徳的あるいは宗教的影響を学生に及ぼすことができるとするならば、それは……大学全体にみなぎっている気風による」といった（鷲田、二〇一五）。シスターから多くを学んだ者として、その気風を少しでも伝えていきたい（本学教授）。

（追記…シスターは現在、ニューヨーク郊外の施設におられる。お会いしたい！）